

## 縦横

1989年6月3日に就任し、たった52日後の7月24日には早くも辞意を表明してしまった内閣総理大臣宇野宗佑から現在の麻生太郎首相まで、20年の短期間になんと13人の内閣総理大臣が入れ替わり立ち代り登場しては消えていった。5年5ヶ月と比較的在任期間の長かった小泉純一郎首相を「異例」だったとしてここから差し引くと、なんとこの国では、最高権力者のポストが一人当たり平均1.2年しか続かなかつた計算になる。しかもその降り方ときたら、激しい権力闘争によって引きずり降ろされたというよりも、まるで非力な高飛びこみ選手が飛び込み台に上がって下を見たらあまりの高さに身がすくんでしまい、飛び込みをあきらめてすずす階段を歩いて降りてきたような、まるで「無資格棄権」というべき有様であった。これは、偶然なのか、必然なのか。必然だとすれば、何に原因があるのだろうか。

調べてみると、こういう権力の短命に関する歴史的な例はまだ他にもある。大正デモクラシーと称されたシュトゥルムウントドラングの時代が終わりを告げ、着実に軍靴の音が聞こえ始めた1924年1月7日に就任し、早くも同年6月7日には辞意を表明した清浦奎吾内閣から数えて21年間、敗戦の1945年8月15日に辞任した鈴木貫太郎首相まで、なんと19人の内閣総理大臣が折り重なるようにひしめいていたことがある。こちらも平均して1.1年の短期間であった。この異常なほどの権力者の短命は、狭量なナショナリズムと帝国主義という時代を貫通していたパラダイムの終焉に直面した為に人材が払底してしまったためであった。つまり、この戦中期を貫通するパラダイムがもはや維持できない状況がきていたことを如実に示していたのである。

このようにパラダイムが維持できないために政治権力中枢が短命化した例はまだ他にもある。実は江戸幕府の幕末期がそうだった。特に、伊井直弼の桜田門外の変を機に尊王攘夷論が猖獗を究め、老中安藤信正が水戸浪士に襲撃された坂下門外の変が勃発した1862（文久2）年1月以降、1868年、徳川幕府崩壊までの6年間に江戸幕府の老中職は24人の多きに達した（野口武彦著『幕末バトル・ロワイヤル』（新潮新書））という。これは、江戸時代全平均の6.5倍の多さになる。明らかに異常である。

ここまで見てくると、宇野宗佑内閣以来現在まで続いている内閣の短命化の原因も、歴史的なパラダイムの終焉と関係づいていることが見て取れよう。しからば、これらの例で拒否されていた「時代パラダイム」とは何なのだろうか？幕末の例で言えば、総体として家康以来の江戸徳川政権の家産政治であり、特に鎖国政策であって、それゆえに明治維新を招いたのであろう。また、鈴木貫太郎内閣までの短命性は、明治維新以来の立憲君主制とその帝国主義的パラダイムが不適應を起こしていたためであつたらう。

このように見てくると、現在起っている政権の不適應は、政官財の利益のみを優先してきた強欲な保守体制というしかないのではないだろうか。広く人材をリクルートすることなく、「地バン・カンバン・カバン」を武器に「世襲政治家の、世襲政治家による、世襲政治家のための政治」、これこそが不適應の最たるものである。

つまり今突きつけられている歴史的な要求は、「明治維新」級、「15年戦争敗戦期」クラスの大規模な「変革」だと知るべきである。それゆえ、政治・経済・文化・教育・社会の全ての隅々にまで及ぶパラダイムシフトが要求されているのであろう。

世界を見渡しても、20世紀の全期間を通じて世界の中心であり続けたパックス・アメリカーナの

没落が顕著になってきた。それ以前にも、コミンテルン以来のパックス・ルッソ（ソ連・東欧圏覇権）がパラダイムシフトを要求されて崩壊していた。2008年世界同時不況は、新自由主義・新保守主義を原理とする後期金融資本主義に変更を迫っている証左である。そういえば、ジョージ・ブッシュ大統領からバラク・オバマ次期大統領への政権移動が最大のパラダイムシフトではないだろうか。

奇しくもパラダイムの激しく揺らぐ1990年以降の時代に、政治・行政の保守的体質を一貫して批判し続けてきた山梨の地域総合雑誌『甲斐ヶ嶺』が本号をもって休刊するという。事態は「休刊」だが、現代のマスメディアが期待された使命を忘れて目前の利益のみを追求し、権力に迎合し、時代に阿ねてきた中であって、『甲斐ヶ嶺』はいささかも姿勢を崩すことの無かった点において、これは「完走勝利」といっていい快挙であった。私たちに課せられた問題は、『甲斐ヶ嶺』の「成果」を承継しながら、今後地域人として具体的な行動をどう選択していくかである。幸い、田草川氏からは問題点別にブックレットのような形でその都度その都度オピニオンを発する機会が作られればという提案を伺っている。期して待ちたいと思う。

小出昭一郎先生・伊東壮先生という偉大な先人の跡を汚しながら巻頭言「縦横」を書かせていただいた。思えば、筆者の幸運、実に筆舌に尽くし難い。すでにお二人とも鬼籍に入られた。「年年歳歳花相似たり、歳々年々人同じからず」。そう遠からず、筆者もお二人に会いに行く予定だが、その折には、お二人の生前より良い話が出来たらよいのだがと願っている。そんな夢を描きつつ筆を擱く。

ご愛読ありがとうございました。